

光の王国 カーテンコール2

炎のたからもの

カーテンコール2 炎のたからもの

マイカラス王国の騎士ケイウエリ・ライ・ダイアンは、夜の城内をぶらぶらと歩いていた。

一応、城内の警備という意味もある。国王ハルティとダルジイの結婚式からまだほんの数日、城中、いや王都中にお祭り騒ぎの余韻が残っている。こんな時こそ、警備は厳重にしなければならぬ。城の中庭を歩いていて、池の辺にひとつの人影を見つけた。しゃがみ込んで、水面を見つめている。

ケイウエリは、足音を立てずにそっと近付いて声をかけた。

「こんなところでどうしました？ 姫様」

一瞬びくつと身体を震わせて、その人影が顔を上げる。ハルティの妹のアイミイだ。もちろん、ケイウエリには最初からわかっていた。

「ケイウエリ様……」

アイミイは、幾分うるたえている様子だった。

まずいところを見られた、と思っっているのかもし

れない。

「元気ないですね」

「そ、そんなことないですわ……」

なにげない口調で誤魔化そうとしているが、その頬に微かな涙の痕があることを、ケイウエリは見逃さなかった。

ここ数日、彼女はずっとこんな調子だ。

まあ、無理もないかもしれない。想いを寄せていた奈子が、突然この国を去ってしまったのだから。

それ以来、アイミイの笑顔を見た記憶がなかった。

あの、咲き誇る花のような笑顔を。

「そういえば……」

ケイウエリは、意図的に話題を変えた。

「姫様と初めてお会いしたのは、ここでしたね」

きよとんとした表情で、アイミイはこの大柄な騎士を見上げた。

* * *

それは、ケイウエリがまだ少年と呼ばれる年齢だった頃のことだった。

当時から歳の割には大きな体格をしていたが、その外見に似合わず、園芸を趣味としていた。美しい花を育てることは、剣術や馬術の稽古と同じくらい楽しいことだったのだ。

だから、騎士見習いとしての仕事の合間に、城の庭師に頼み込んでこの中庭の花壇の手入れをさせてもらっていた。

そんなある日、ケイウエリがいつものように花壇の手入れをしていた時のこと。

「きれいなお花ね」

突然の声に顔を上げると、いつの間にか、小さな女の子が傍に立っていた。彼女自身が満開の花のような笑顔で、今が盛りの花壇を見つめている。

「ひとつ、あげようか？」

「いいの？」

瞳を輝かせて訊き返してくる女の子に、ケイウエリも笑ってうなずいた。

「いいに決まってるさ。この花はみんな、君と君のお母さんのものなんだから」

そう言っつて、一番きれいに咲いていた花を一輪切り取ると、美しく編まれた金髪に飾ってやった。

「……ありがとう！」

池の辺に屈んで、花を飾られた自分の顔を水面に映していた女の子は、やがて満面の笑みを浮かべてぱつと立ち上がると、子供らしい突然の動作で駆け出していく。

「お母様、お母様、見て！」

ぴよぴよこと走り去る少女の後ろ姿を、ケイウエリは静かに微笑んで見送っていた。

* * *

「……そんなこともありましたっけ？ ごめんなさい、憶えてないです……」

「姫様はまだ小さかったから、無理もないですよ。それはそうと……」

ケイウエリはアイミイの顔の前に、大きな拳を

差し出した。外からは何も持っていないように見えたのに、手を開くとその中に一輪の花がぽんと現れる。

「どうぞ」

驚いて目を見開いたアイミィは、おずおずと花を受け取った。その茎に細い紐が結ばれている。ケイウエリの手の中からすると伸びていくその紐には、マイカラス王国の小さな旗がずらりと結びつけられていた。

「今はこれが精一杯ですが……」

「……なんですの、これ？」

不思議そうにアイミィが訊く。ケイウエリは微笑かに肩をすくめて苦笑した。

「ナコに教わった、おまじない……でしょうかね。彼女の故郷では、悲しみに沈んでいる女の子を慰める時にはこうするんだそうで」

「ナコ様が？」

効果てきめんだった。アイミィの顔にぱつと光が差す。

「旅立つ直前にね。姫様とゆっくり話をする時間

もないので、よろしく伝えてくれ、と」

「そう、ナコ様が……」

うつとりとした表情で微笑んで、アイミィは手の中の花に頬を寄せた。

* * *

その頃

「……つ、くしゅんっ！」

奈子は、大きなくしゃみをしていた。

「……誰か、噂してるかな？」

鼻の下を指で擦りながらつぶやく。

「そうですね。昼食を食べた店の女の子かな。それとも昨日泊まった宿の娘かも」

由維が面白くなさそうに言った。その言葉には妙に刺がある。

「私がちよつと目を離すと、すぐ女の子に色目使うんだから」

「い、いや、アタシは別にそんな……。これは、

ほら、あれだよ。レイナの性格が……」

しどろもどろに弁解する奈子だが、由維はつんと横を向いてしまう。

「ふうんだ、毎回毎回それで誤魔化されませんか
らね」

「由維いゝ、誤解だつて」

始まったばかりの二人の旅は、早くも前途多難のようである。

あとがき

はい、カーテンコールの第二弾です。

これまでなかった、ケイウエリ×アイミイのお話。

しかし、あれですね。以前からロリコン疑惑のあったケイウエリですが、これで有罪確定かと(笑)。どうりでダルジイには興味を示さなかった筈。ケイウエリ×ダルジイを推すファンは多かったですけどね。

今回ちよい役のナコユイは相変わらずです。この分では、二人がマイカラスに帰ってくる時には、旅先でたぶらかされた美少女の集団が奈子の領地に移住してくるかも(笑)。

その辺りのエピソードは、今後のカーテンコールをお楽しみに。

では今後の予定。

現在、オリジナルの新作長編『一番街の魔法屋』を執筆中です。異世界ファンタジー風味のお

嬢様学園 ソフト百合 コメディです。『マリア様』ファンばかりでなく、『光』ファンも見逃せない内容になっている筈。

公開は二 二年初めを予定。こちらもお楽しみに。

それでは、また次回作でお会いしましょう。

二 一年十二月 北原樹恒

Kisune@nifty.com

『光の王国』公式サイト

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamyuchep/mila/>

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamyuchep/chiron/>

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。